Japanese Association for Tibetan Studies

『法門』及び『法門備忘録』の敦煌出土写本について

石川　美恵

1　はじめに

9世紀の三大翻訳師：カ（sKa）・チョク（Cog）・シャン（Zhang）の一人で，大校閲翻訳師（zhu chen gyi lo tsa ba）の称号を持つカワ・ペルツェク（sKa ba dPal brtsegs）には，数点の著作があり，それらは大蔵経中にも現存する[(1)]。そのうち『法門』(*C*) は8フォリオ程の語彙集で，前序には「『備忘録』の本頌」(*C*, 345b1)[(2)]と記されている。この『備忘録』は大蔵経中では，*C*の直前に収載された『法門備忘録』(*J*) をさすと思われるが，同書もペルツェク等[(3)]によって編纂された仏教語釈集である。分量は北京版では70フォリオ程であり，これは同時期に活躍した同じく三大翻訳師のシャン・イェシェーデ（Zhang Ye shes sde）等が編んだ欽定語釈集『二巻本訳語釈』(*GB*) の二倍弱に相当する。

筆者はこれまで*J*と*C*の関係は，同時期の欽定語彙集である *Mahāvyutpatti* (*MVP*) とその難語釈の*GB*と同様のものであると想定していた。しかし，前序に「本頌」とあるものの，実際には*C*は*J*から語彙を網羅的に抜き出したものではないし，*J*は*C*の収載語に対して逐語的に語釈を行ったものでもない。*C*に添った注釈は前半のみで，後半は一致せず，むしろ*J*は*C*を法数によって整理しようとした意図が窺える[(4)]。

ただ，*J*は*MVP*と関わりが深く，掲載された見出し語700余語中8割が*MVP*に一致している。しかし*GB*と採用術語で一致するのは半数程であるし，*J*は*GB*より詳しい解説が施されており，語釈の内容も一致しない[(5)]。つまり，一方が他方の原本になった（例えばペルツェクが，語釈においてイェシェーデの編著作を大いに参照した，もしくはその逆の構図がある）というような関係ではないことが明らかである。*J*の特徴は，*MVP*から漏れた仏教術語も扱っていることであり，その意味では確かに仏教語の備忘，覚え書き的なものと言えるかも知れない。だが，内容は単なる「備忘」というレベルではなく，詳細な仏教語釈集と言える。

C，並びに*J*には敦煌出土の関連写本が幾つか存在する（原田 1985, 435）が，本稿では『法門備忘録』の一部，もしくは「法門の要略」であることが明記されているスタイン蒐集写本チベット語文献の Stein 608（Poussin, No. 608）と Stein 609（Poussin, No. 609），ペリオ蒐集チベット語文献の Pelliot 121（Lalou, No. 121）と Pelliot 602（Lalou, No. 602）を用いて，これら写本群と『法門』および『法門備忘録』との関係を考察する。各写本に関してはIDPに掲載されている画像を使用したが，Stein 608のみ画像が未掲載であったため，東洋文庫所蔵マイクロフィッシュの紙焼き複製を使用した。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

2　各写本の特徴

2.1　Stein 608

末尾に『法門備忘録』と明記された，ウメー書体，1フォリオ表，6行のみの断片である。五無間罪と近五無間罪について書かれており，語釈としては一枚で完結している。表記に関しては，mi，me に敦煌写本特有の myi，mye が用いられる他，ད は ད྄ が用いられており，更に判読しうる限り終辞以外のすべてにおいて shad の直前の語にも tsheg が存在する。終辞に関しても，tsheg の残るものもあるため，鮮明な影像で見ることが出来れば，終辞の tsheg の有無を調べることが出来るはずである。

2.2　Stein 609

4フォリオからなり，写本の左マージンにはウチェン書体で ka，kha，ga，nga と葉数が示されている。1枚の行数は一定せず，ka：表6行・裏9行，kha：表裏各10行，ga：表8行・裏10行，nga：表9行・裏8行で，ka の1行目から5行目までがウチェン書体，6行目以後 nga の終わりまでがウメー書体で書かれている。表記については Stein 608 と同様に，mi，me には myi，mye が用いられる他，ད྄ の使用や，nga 以外の shad の直前の語にも tsheg が付されている。また，Stein 608 には見られなかった左に流れる gi gu が頻出する。終辞に関しても添後字がなく འོ が接続する場合，直前の字に tsheg を付し，現行のように直接接続してはいないことがあるが，これも規則的ではない。属格に関しても同様で，འི は直前の字に直接接続しないことがある。この他，men tog（me tog），mye ngan（mya ngan）など，現行語句との違いも多い。

内容は，三宝や三界などの基本的な仏教語釈集になっており，冒頭で「法門の要略」であることが明記されている（本稿末に添えた，付〈T2：Stein 609〉参照）が，十二因縁を説く途中で終わり，完結していない。

2.3　Pelliot 121

ウチェン書体で書かれた数種類の文献の集まりで，『頓悟論要約』『大乗中観義』『禅定論』『七祖録』，さらに「法門の要略」の五部から成る（沖本 1977, 461-462）(6)。このうち，22a1 から 25a5 までの4フォリオ（1葉表裏に5行ずつ）が，「法門の要略」に相当する。内容は三宝と三界の解説であり，今回の照合の結果，Stein 609 の 1a1 から 2a4（「三界」の解説の途中まで）に対応することが明らかとなった。ただ，細かい異同は多く，同じように「『法門』の要略である」と称した文献でありながら，同一文献の単なる写しというわけではなく，増広や省略が見られる。

表記の特徴は，Stein 609 と違い nga 以外は shad の前に tsheg は付かない。つまり現行通りの表記となっている。単語に関しても，新訳語でより整えられているが，左に流れる gi gu は Stein 609 より増えている。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

2.4 Pelliot 602

左マージンに ca とウチェン書体で葉数が記された 1 フォリオ表のみの断片で，内容は十二因縁の途中から終わりまでが解説され，末尾には「法門の要略，終わる」と書かれている（本稿末の，付〈T4:Pellot 602〉参照）ことから，本写本が一連の文書の最終葉であることがわかる。

本稿末では本写本も含めた四写本と北京版，並びに対勘本との異同を調査し注を添えて，活字化した照合版を付しているが，その照合の結果，本写本は Stein 609 に続く一葉であることが明らかになった。両者とも同じく敦煌莫高窟から出土し，サイズも Stein 609 が 7.7 × 28.5 cm，本写本は 7.7 × 28.6 cm と誤差の範囲であり，葉数も nga に続く ca で，書体も同じであり筆跡も同一と思われる。しかも，十二因縁を解説した内容もスムーズにつながっている。

3 各写本の内容

3.1 Stein 608

前述したように，五無間罪と近五無間罪(7)について語釈されたもので，*J*. 320b4 に相当し，*MVP*（通し番号）は，2333-2338（以下，*MVP*,『翻訳名義大集』:*S*, *GB* に続く数字は通し番号を表す），*S* は 2323-2328 に相当する。この術語は *C* にはなく，*GB* にも語釈はない。しかし，*J* は「このような業を作れば，苦しみが間断なく無間に続く地獄の住人に生まれることから“無間”と言われる」(本稿末の照合版，注①参照）と説明している。ただ，本写本ではその部分は略され，内容的にはこれもまた「要略」となっていることがわかる。近五無間罪（*MVP*. 2339-2344, *S*. 2329-2334）についても，*J* は本写本の文章の後に，「地獄の苦しみはあるけれども，無間ほどではないことから近無間」であることが説かれ，阿羅漢尼や菩薩などについても具体的に説明されている（*J*. 320b8-321a6）が，本写本ではその部分が省かれ，末尾のタイトル名『法門備忘録』を記している。

本写本では，このタイトルの後に書かれた一文 (’jig rten ’jog pa // chos ...) は，その後の二，三語が判読できないこともあり，章の名前なのか，他の何かであるのかはっきりしない。現存する *J* にこのような章立てはなく，五無間罪の前後の術語は「五」の法数を集めたものであり，「世間を設定する」というような一文と関連づけることができない。ただ，*C* もしくは *J* の『要略』のごときものが章立てで分類されたものであったとも考えられる。また，本写本が，五無間罪と近五無間罪だけの術語解釈で完結していることからすると，この『要略』のごときものが必要に応じて部分的に書写されていたと推測される。

3.2 Stein 609, Pelliot 121

ここでは，三宝，三界，六道，五蘊，十八界，十二因縁などが説明され，各説明の中で四生や識などが詳説されている。以下に，内容を科段で示す。見出し語に続く（　）に参照文献の所在や通し番号を記したが，対応がないものは記載していない。(尚，本稿末の照合版内のローマ数字が付された段落分けは，以下の科段に対応する。その際，〔　〕は照合版にはなく便宜的

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

に付したものである。)

Ⅰ. 三宝 (*J*. 310b1, *C*. 347b8)
　Ⅰ-ⅰ. 一体三宝 (Pelliot 121, 22a1-b5)
　Ⅰ-ⅱ. 別体三宝 (Pelliot 121, 22b5-. 後半一致せず。)
　Ⅰ-ⅲ. 住持三宝 (Pelliot 121, 23b4-24a1)
　Ⅰ-iv. 補遺 (別体三宝) (Pelliot 121, 24a1-5)
〔Ⅱ. 三界と六道 (*J*. 313b3, *C*. 352a5; 三界: *MVP*. 3068-3071, *S*. 3071-3074)〕
　〔Ⅱ-ⅰ. 三界〕
　　〔Ⅱ-ⅰ-ⅰ. 欲界と十善〕
　　　Ⅱ-ⅰ-ⅰ-ⅰ. 欲界 (Pelliot 121, 24a1-25a1)
　　　Ⅱ-ⅰ-ⅰ-ⅱ. 十善 (Pelliot 121, 25a1-5. 末尾を欠く。)
　　Ⅱ-ⅰ-ⅱ. 色界 (*J*. 313b4, *C*. 352a5, *MVP*. 3070, *S*. 3073)
　　　　五浄居天 (*J*. 313b4, *C*. 352b2-3, *MVP*. 3099-3103, *S*. 3102-3106)
　　Ⅱ-ⅰ-ⅲ. 無色界 (*J*. 313b5, *C*. 352b3, *MVP*. 3106-3110, *S*. 3109-3113, *GB*. 393)
　Ⅱ-ⅱ. 六道
　　　　四生 (*J*. 317b5, *MVP*. 2286-2290, *S*. 2278-2282)
　Ⅱ-ⅲ. 三毒
　　Ⅱ-ⅲ-ⅰ. 声聞・独覚
　　Ⅱ-ⅲ-ⅱ. 大乗者
Ⅲ. 識 (*J*にも対応しない。)
　Ⅲ-ⅰ. 三識
　Ⅲ-ⅱ. 二識
　Ⅲ-ⅲ. 一識
　Ⅲ-iv. 識と涅槃
　　Ⅲ-iv-ⅰ. 阿頼耶識
　　Ⅲ-iv-ⅱ. 染汚意
　　Ⅲ-iv-ⅲ. 意識
　　Ⅲ-iv-iv. 前五識
　　Ⅲ-iv-ⅴ. 刹那の識
Ⅳ. 五蘊 (*J*. 274a4, *C*. 345b2, *MVP*. 1837, *S*. 1832, *GB*.266; 受蘊: *J*. 274b5, *C*. 345b2, *MVP*. 1838; 1925-27, *S*. 1833; 1914-16, *GB*. 267. 想蘊: *J*. 275a2, *C*. 345b2, *MVP*. 1839; 1929-31, S. 1834; 1918-20, *GB*. 268. 行蘊: *J*. 275a5, *C*. 345b5, *MVP*. 1840, S. 1835, *GB*. 269. 識蘊: *J*. 286b1, *C*. 345b2, *MVP*. 1841, *S*. 1836, *GB*. 270)
Ⅴ. 十八界 (*J*. 287b7, *C*. 346b7, *MVP*. 2050-2068, *S*. 2040-2058, cf. *GB*. .277)
　Ⅴ-ⅰ. 六根
　Ⅴ-ⅱ. 六境
　　　六識
Ⅵ. 十二因縁 (無明-名色) (*J*.288a6, *C*.346b8, *MVP*. 2250-2267, *S*. 2241-2258, *GB*. 278)

本写本は,「法門の要略」であると明記されているが, *C*や*J*とも術語の掲載順序も違い, 内容的にも省略だけでなく増広も激しく, 異なる解釈を掲載する部分も多い。三宝についても, *J*と冒頭が一致するのみで, *J*にはない一体三宝, 別体三宝, 住持三宝の解説を加え詳説している。この三種三宝については, 漢文資料ではあるが『大乗中宗見解』(8)等に見られ, ことに前掲書の原本と考えられる漢文の『法門名義集』(9)はチベット支配時代の敦煌で校勘されたという(田中 1966)。今回は『法門名義集』を参照するまでに至らなかったが,『大乗中宗見解』の三宝解釈に関しては, 内容的には本写本とかなり近いことがわかった(10)。ただ, 他の術語の掲載順序や各語釈については同書とは必ずしも一致しない。

次に三界については, 欲界の説明の中で三悪趣と十善に触れ解説を施しているが,「十善」の語は*C*にもなく, *J*にも語釈はない。色界は名称のみ掲載はあるが, *J*は欲界の天種の名前を述べるのに引き続き, 初禅から解説している。語釈に関しては*GB*と共通点が見られ, *GB*が天

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

の一つ一つをトピックとして立てて説明しているのに対し，本写本はむしろ，*GB* の諸天の内容を色界の括りの中でまとめたようにも見える。無色界の語釈は *GB* より詳しい。

六道の術語は *C* にもなく，*GB* では天や傍生の名称などに分かれて解説し，一括りにされていないが，本写本では四生と関連づけて解説され，四生の説明もなされる。四生に関しては *J* の要略と言え，四生の例をいくつも並べる *J* の説明を省いて簡潔にまとめている。続いて，輪廻の原因としての三毒にも言及するが，これは *J* にはない。

さらに「識」だが，阿頼耶識や染汚意の名称は *MVP* にもあるが，*GB* に語釈はなく，*C* にもなく，*J* にも識蘊の説明の中で術語は見出しうるが，一致する語釈はない。しかし本写本では，一識，二識，三識，といった名称も並べ，阿頼耶識が染汚意以下に対してどのように働くのか，まで詳しくわかりやすい比喩を交えて解説している。阿頼耶識を水や川と見るのは唯識説ではよく見られることだが，今の段階では引用典拠を見出せていない(11)。

次に五蘊については，色蘊，受蘊，想蘊，行蘊は簡潔にまとめている。逆に *J* は詳細な説明を加えており，ことに行蘊は心相応行や心不相応行の一つ一つを説明していくスタイルを取っている。識蘊の解釈は，本写本にあるような諸種姓とものの捉え方の関係で説くことはなく，阿頼耶識と根との関わりで説明し，切り取り方が異なっている。また，*J* が五蘊に引き続いて十二処，十八界，六界，十二因縁の順に説明を行うのに対して，本写本は十八界，六境，十二因縁と続き六界には触れない。「眼根は割れた胡麻のよう，耳根は樺を捻って切ったよう，鼻根は針を並べたよう，舌根は半月のよう，身根は鎧を着けたよう，意根は猿が一方の窓から他方へ出てくるよう」(4b2-3) と六根の説明(12)も本写本は具体的であり，用いられている六窓一猿の比喩も *J* にはない。六境については *J* には十二処が「六根と六境」であると記して名称のみ記すのに対し，本写本では逆に六境の説明の中で十二処を名称のみ用いている(13)。

3.3 Pelliot 602

先の Stein 609 は十二因縁を説く途中の名色までで終わっているが，Pelliot 602 は，その名色から十二因縁の項目の最後まで『備忘録』より簡潔に各支分の関係を説き，輪廻と涅槃にどう関わっているのかもわかりやすく説明している(14)。以上のことからすると，Stein 609 と Pelliot 602 を合わせた「法門の要略」は，内容からしても破綻はなく，一つのまとまりを持ったテキストであったと考えられる。

4 「法門の要略」

これまで見てきたように，Stein 608 は『法門備忘録』と明記しているが，内容的には要略と思われる。また，当時の敦煌においては「法門の要略」と名付けられた完本が存在し（Stein 609, Pelliot 602），そのヴァリアント（Pelliot 121）があることから，よく書写されていたことが推測される。しかしここで，この「法門の要略」というのは『法門』の「要略」なのか，『法門要略』という一つの書物なのかと言う疑問が生じる。しかも，Stein 608 は『法門備忘録』の要略と言えるのに，なぜこの『法門要略』は『法門』の要略なのだろうか。

これに関連した疑問は他にもある。*J* の語釈には，しばしば「～とは何か？と言われるのは」

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

(gang zhe na zhes bya ba) という一文が現れ，テーマの提示自体が引用文であることを窺わせていた。*J* の本文の冒頭部分で，「定義については『瑜伽論』を依用して示した」(*J.* 274a5: mtshan nyid yo ga ts'a rya las 'byung ba de ston to) と『瑜伽論』の名前を挙げるものの，内容に関して『瑜伽論』に完全に沿っているわけでもないため，*J* の語釈の典拠が本当に『瑜伽論』であるのか（或いは，ここは「瑜伽師〔の著作〕」と読むべきなのか）判然としなかった。

各写本と現存の *C* や *J* との内容がピッタリとは一致しないことや，これが「要略」であることを差し引いても省略や増広が著しいことなどを斟酌すると，大蔵経所収の『法門備忘録』が典拠とした『法門』は，ペルツェクが著した術語の列挙だけで語釈のない，大蔵経所収の『法門』とは別のものだった可能性を否定できない。実際，*C* の奥書には「「小」『法門』〔という〕アーチャーリヤ・ペルツェクによるご著作が完了した。」(chos kyi rnam grangs chung [352b5] ngu a'a tsa rya dpal brtsegs kyis mdzad pa rdzogs so) とある。確かに 8 フォリオという小部であるが，別の『法門』の存在が想定されうるとすれば，逆にこの「小」は，大部の『法門』に対応するものだったのではないだろうか。*GB* の奥書にあるように，「大集」である *MVP* に対して，*GB* の位置づけは「中集」であるわけだから，このような大中小の対応関係にある語彙集や語釈集が他にもあったということは十分考えられる。

5　まとめ

敦煌写本と大蔵経所収本との内容の相違から，『法門』と言う名前の, 現存する『小法門』とは別の「大」と名付けられるような，ある程度の分量の語釈を含むテキストがあり，この『大法門』をもとに『法門備忘録』は編まれたのではないかと推定した。更に，敦煌写本の『法門要略』もまた，その『大法門』の「要略」ではないかと考える。本稿で扱った写本が敦煌の漢文文献とも近い内容を持ち，禅宗文献とも関わることを想起すれば，『法門』や『法門備忘録』と言った語彙集や語釈集に対しても，より広い視野で捉え直す必要があると言えよう。

略号表

C　dPal brtsegs. *Chos kyi rnam grangs.* Peking ed. No. 5850. mDo 'grel, cho.『西蔵大蔵経』Vol. 145. 鈴木学術財団, 1957.

C2　中国蔵学研究中心《大蔵経》対勘局対勘・編輯『中華大蔵経　丹珠尓（対勘本)』Vol. 116, No. 3608, 北京：中国蔵学出版社, 2005.

DG　Yaśomitra: Grags pa'i bshes gnyen. *Chos mngon pa'i mdzod kyi 'grel bshad.* Tr. Viśuddhisiṃha, dPal brtsegs. Peking ed. No. 5593. mNgon pa'i bstan bcos, cu.『西蔵大蔵経』Vol. 116. 鈴木学術財団, 1957.

DK　Ed. dPal brtsegs, kLu'i dbang po. *Pho brang stong thang lhan dkar gyi chos 'gyur ro cog gi dkar chag.* 中国蔵学研究中心《大蔵経》対勘局対勘・編輯『中華大蔵経　丹珠尓（対勘本)』Vol. 116, No. 3609, 北京：中国蔵学出版社, 2005.

DNG　*Don rnam par nges pa zhes bya ba'i chos kyi rnam grangs,* Peking ed. No. 983. bKa' 'gyur mdo, shu.『西蔵大蔵経』Vol. 39. 鈴木学術財団, 1957.

DZ　dByig gnyen. *Chos mngon pa'i mdzod kyi bshad pa.* Tr. Jinamitra, dPal brtsegs. Peking ed. No. 5591. mNgon pa'i bstan bcos, gu.『西蔵大蔵経』Vol. 115. 鈴木学術財団, 1957.

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

GB *sGra sbyor bam po gnyis pa*. In *A Critical Edition of the sGra sbyor bam po gnyis pa. An Old and Basic Commentary on the Mahāvyutpatti.* Ed. M. Ishikawa. Tokyo: Toyo Bunko, 1990.

IDP International Dunhuang Project. 国際敦煌プロジェクト：シルクロード・オンライン。http://idp.afc.ryukoku.ac.jp/

J dPal brtsegs (la sogs pa). *Chos kyi rnam grangs kyi brjed byang*. Peking ed. No. 5849. mDo 'grel, cho.『西蔵大蔵経』Vol. 145. 鈴木学術財団, 1957.

J2 中国蔵学研究中心《大蔵経》対勘局対勘・編輯『中華大蔵経　丹珠尓（対勘本)』Vol. 116, No. 3607, 北京：中国蔵学出版社, 2005.

Lan *'Phags pa lang kar gshegs pa'i theg pa chen po'i mdo*. Peking ed. No. 775. mDo sna tshogs, ngu.『西蔵大蔵経』Vol. 29. 鈴木学術財団, 1957.

MD *'Phags pa yongs su mya ngan las 'das pa chen po'i mdo*. Peking ed. No. 787. mDo sna tshogs, ju.『西蔵大蔵経』Vol. 30. 鈴木学術財団, 1957.

MVP *Mahāvyutpatti*. In *A New Critical Edition of the Mahāvyutpatti. Sanskrit-Mongolian Dictionary of Buddhist Terminology.* Ed. Y. Ishihama, Y. Fukuda. Tokyo: Toyo Bunko, 1989.

S 榊亮三郎『梵蔵漢和四訳対校　翻訳名義大集』全二巻，国書刊行会，1981.

文献表

Lalou, Marcelle

1939 *Inventaire des Manuscrits tibétains de Touen-houang*, conservés à la Bibliothèque Nationale, vol. 1, Paris.

Poussin, Louis de la Vallée

1962 *Catalogue of the Tibetan Manuscripts from Tun-huang in the India Office Library*, London: Oxford University Press.

石川　美恵

2008 「dpal brtsegs の "chos kyi rnam grangs kyi brjed byang" について」『印度学佛教学研究』57-1, 平成 20 年，pp. 446–451.

沖本　克己

1977 「敦煌出土西蔵文禅宗文献の研究（1）」『印度学佛教学研究』26-1, 昭和 52 年，pp. 458–462.

金山　正好

1940 「大乗中宗見解とその蔵漢対音」『大正大学学報』30, 31, 1940, pp. 335–370.

田中　公明

2009 『チベットの仏たち』発行：方丈堂出版，発売：オクターブ。

田中　良昭

1966 「三宝問答と大乗中宗見解」『印度学佛教学研究』15-1, 1966, pp. 332ff.

原田　覚

1985 「吐蕃訳経史」『敦煌胡語文献』（講座敦煌 6)，大東出版社，昭和 60 年，pp. 419–448.

宮本　正尊

1943 「第四　燉煌出土大乗中宗見解に就いて」『根本中と空』第一書房，pp. 217–290.

山口　瑞鳳

1985 「『デンカルマ』八二四年成立説」『成田山仏教研究所紀要』第九号，pp. 1–61。

芳村　修基

1974 「チベット仏教資料」『インド大乗仏教思想研究』百華苑，pp. 1–221.

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

注

(1) Peking edition. No.5843-5844, 5849-5851.（山口 1985, 57-58, n. 54; 原田 1985, 435）

(2) chos kyi rnam grangs kyi brjed byang gi rtsa ba a'a tsa rya dpal rtsegs[sic] la sogs pas mdzad pa // 本文より小さい字体で，ペルツェクを主とする複数人によって編纂されたことが記されている。『プトンの仏教史』でも，*J*とともに*C*も多くの翻訳僧の合作とする（山口，1985, 58, n. 54）が，*C*の奥書ではペルツェク一人の著作であるように記されている。(*C*, 352b5; *C2*, 783) chos kyi rnam grangs chung ngu a'a tsarya dpal brtsegs kyis mdzad pa rdzogs so // 更に，諸版の前序を比較すると，ペルツェクの綴りを現行通り記す以外，ナルタン版は北京版と一致するが，デルゲ版とチョーネ版は前序ではなく，タイトルとして掲げている。(*C2*, 769; 784. n. 769-①: chos kyi ... rtsa ba bzhugs /) *C*の内容を*J*と照合する限り，*C*は*J*の本頌を抜き出したものとは思えない（石川，2008 参照)。前序，もしくはタイトルは後世の付加であって，奥書こそ本文著作（もしくは編輯）と同時代のものと理解するべきではないかと考える。従って，『法門』はペルツェクの著作であると推測する。

(3) 『法門備忘録』の著者に関しては「『デルゲ版テンギュル目録』(464a4-5) のみがペルツェクの作とする」（山口 1985, 58, n. 54）が，北京版（*J*, 345a8）並びにデルゲ版を底本とした北京版・ナルタン版・チョーネ版との対勘本（*J2*, 754）においても，奥書では，ペルツェクを中心とした編著としている：chos kyi rnam grangs kyi brjed byang zhes bya ba lo ts'a ba chen po / dpal brtsegs ra kSita la sogs pa rnams kyis mdzad pa rdzogs so // //

(4) 石川（2008, 449, ll.15-29）参照。

(5) *J*と*C*, *MVP*, *GB*の収載語彙を比較したリストについては，石川（2008, 446-448）参照。

(6) 沖本（1977）参照。なお沖本は『法門要論』とする。

(7) 五無間罪や近五無間罪については『倶舎論』にも説かれるが，ピッタリとは一致しない。『デンカル目録』に名前が挙げられ，前伝期に翻訳されていたことが明らかな（芳村 1974, 126）『入楞伽経』は，五無間罪の名目を列挙する点で一致する。: de la blo gros chen po mtshams med pa lnga rnams gang zhe na // 'di lta ste / pha dang / ma dang / dgra bcom pa gsod pa dang / dge 'dun dbyen pa dang / de bzhin gshegs pa la gnod sems kyis khrag phung [121b4] pa'o // (*Lan*, 121b3-4)
『入楞伽経』は，マハーマティの問いに世尊が答える問答形式で話題が展開する経典だが，世尊が「～は何かと言えば」という定型で説き始める形式は，『法門備忘録』の語釈の説き起こし方と酷似している。同じ語釈集でありながら，*GB*にはこの定型は見られない。

(8) 宮本（1943）参照。敦煌出土写本も数点存在する（沖本 1977, 459, n. 3)。

(9) 敦煌出土本が，大正新修大蔵経中に存在する（金山 1940, 336)。本稿では参照できなかったが，所収の法数は，15 項目掲載の『大乗中宗見解』の約 8 倍というから，120 項目ほどである。

(10) チベット文字で漢音を転写した原文を，宮本（1943, 231-236）が校訂している（旧字は新字に改めた)。五蘊，十八界に続いて三宝が解説されるが，それによると：「帰依三宝。何者是三宝。答，仏宝，法宝，僧宝是名三宝。問，三宝有幾種。答，有三種。問，何者是三宝。答，一体三宝，別相三宝，住持三宝，是名三種。問，何者一体三宝。答，法身体有妙覚以為仏宝。… 問，云何離違争。答，僧者和合為義，法身無相故則無争，故言体無違争，名是為僧。問，何者為一体。答。三宝名殊，其体不異故，名一体。問。何以得知三宝名殊其体是一。答，維摩経云「仏即是法，法即是衆。是三宝皆無為相与虚空等」。納此義辺故名一体。問，云何名為別相三宝。答，六丈（丈六）化身以為仏宝。所説言教以為法宝。大乗十信已上，小乗初果已上，以為僧宝。問，何名別相。… 問，云何名為住持三宝。答，泥龕素像以為仏法。紙素竹帛以法宝。剃髪染依（衣）以為僧宝。」
別相（別体）三宝については『大乗中宗見解』の語釈とは異なり，Stein 609 や Pelliot 121 は「色究竟天の受用身たる大日如来を仏宝」「閻浮提での変化身たる釈迦牟尼が仏宝」と解釈するが，これは *GB. 392* の大自在天処の語釈に通ずる。田中（2009, 14）によれば，吐蕃時代に流行した大日如来と八大菩薩の組み合わせは，大日如来が色究竟天で高位の菩薩達に説法していることを

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

表現したものであるという。敦煌と縁の深い漢文文献と親近性を持ちながら，色究竟天の受用身大日を「仏宝」の語釈に採用するところに，この写本の特徴が見出せる。

(11) 『入楞伽経』では，阿頼耶識という大海の波のように諸々の心が生起することが説かれる。ピッタリと一致する文章はないが，注（7）で前述したように，この経は本稿で扱っている写本と関係が深いと考えられるため，『入楞伽経』の注釈書等も参照する必要があるかもしれない。これについては今後の課題としたい。

(12) 『倶舎論』（*DZ*, 54b3-6）にも意根を除く五根に関して近い表現はあるが，六窓一猿の記述はこの箇所に現れない。

(13) Stein 609 の写本としての特徴を付記すると,「三界に何によって輪廻するのか」を説く最後の 2b9 の中程に，tha の字が挿入されている。「三毒」の解説の 2b10 には，da と読める文字があり，さらに 3a5 の「二識」の冒頭には na が挿入されている。つまり，tha は theg pa chen po の前に，da は dug gsum の前に na は rnam par shes pa gnyis の前に挿入されていることになる。恐らく書写者に術語をセルチェーで示す（単語帳を作るような）意図があったのではないかと推測する。尤もこれ以外の文字の挿入が見つからないことや，na は何故，三識の前に置かれなかったのか？等の疑問が残るが，このようなことから『法門』関連文献がよく学ばれていたことの一端が窺われる。

(14) 十二因縁を簡潔に説くものに『決定義経』がある。: dge slong dag de la rten cing [181b4] 'brel bar 'byung ba yan lag bcu gnyis gang zhe na / 'di lta ste / ma rig pa'i rkyen gyis 'du byed rnams / 'du byed kyi rkyen gyis rnam par shes pa / rnam par shes pa'i rkyen gyis ming dang gzugs / ming dang gzugs kyi rkyen gyis skye [b5] mched drug / skye mched drug gi rkyen gyis reg pa / reg pa'i rkyen gyis tshor ba / tshor ba'i rkyen gyis sred pa / sred pa'i rkyen gyis len pa / len pa'i rkyen gyis srid pa / srid pa'i rkyen gyis skye ba / skye ba'i rkyen gyis rga shi dang（後略）.（*DNG*, 181b3-5）
『決定義経』とその注釈である『決定義経註』は，chos kyi rnam grangs を含む原文タイトルを持つ仏教語釈書だが，内容的に *GB* と共通する箇所も多い。前記のように本写本とも，十二因縁を簡潔に列挙する部分に関しては一致する。しかし，『倶舎論』や世親の著作と関連が深い前掲二書は，*GB* ほどには *C* や *J*，本稿で扱っている写本とは共通しない。

付

本稿で扱った写本を照合し，そのままの表記で活字化したものを付した。その際，T1: Stein 608, T2: Stein 609, T3: Pelliot 121, T4: Pelliot 602 と略号で示した。凡例は以下の通りである。

・T2 を底本とし，T3 や北京版のヴァリアントを注に記した。表面を a，裏面 b とし，底本の所在を示す場合，T1 や T2 などの略号を記さず，[1a1, (J320b4)]，[1a2] 等とした。その際，*J* は行の途中から始まっているため，( )を付した。T2 は ka の表裏を 1a と 1b とし，以下同様にアラビア数字とローマ字で示した。T3 に関しては区別するため [1a1, *T3.22a1*] のように斜体で示した。

・書写者が文字を削除するために記したと思われる水平線も，そのまま注に付した。(ex. ~~ཞེས་པ་པ་ཆེན་པོའི་~~)

・便宜的に段落分けしたが，写本の活字化に際しては出来るだけ忠実に再現したため，pa, ba などの所有接尾辞は正字法の通りに直していない。敦煌写本特有のチベット文字表記については, mi, me は myi, mye が用いられ，前述した通り，添後字を欠く場合の終辞，属格助辞は現行のように基字に連結して用いられるのではなく tsheg を挟むが，その場合，いちいち [sic] を記していない。但し，敦煌写本間でこれらの文字に異同がある場合は，gi gu の違いに関しても注に記した。

・*J* との違いを注記するに際し，デルゲを底本とした四版（デルゲ，北京，チョーネ，ナルタン）の校訂本『中華大蔵経』(*J2*) を参照した。*J* と敦煌写本との shad や nyi shad の異同はいちいち記していないが，敦煌写本間に異同がある場合のみ記した。

・前略，後略は … で示した。明らかに誤字・脱字と思われてもそのまま記し，[sic] を付した。

・shad と次の文字の間隔，nyi shad の間隔については，パソコン・ソフトの自動調整機能によって一定していないが，この点についてはご寛恕願いたい。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

<T1: Stein 608>

[1a1, (J320b4)] 1-།:། ཚམས་མེད་པ་ལྔ་-1 2-ཕ་བསད་པ་-2དང་། །མ་3 བསད་པ་དང་། །དགྲ་བཅོམ་པ་བསད་པ་དང་། །[1a2]དགེ་འདུན་གྱི་དབྱེན་བྱས་པ་དང་། །དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ལ་ངན་སེམས་ཀྱིས་ཁྲག་4 5-ཕྱུངས་པའོ་-5 ། །དེ་6 སང་ 7-ཀྱི་དུས་ན་མྱི་-7 བཞུགས་ [1a3]མོད་ 8-ཀྱིས་། །-8 དམ་པི་9 ཆོས་ 10-བཤིག་པ་-10 དང་11 སྤྱོར་12 རོ། །

13-ཉེ་བ་ལྔ་ལ་-13 14-མ་དགྲ་བཅོམ་པ་-14 སུན་བར་15 བྱས་པ་དང་། བྱང་ 16-ཆུབ་སེམས་-16 [1a4]དཔའ་ངེས་པའི་ས་ལ་གནས་པ་བསད་པ་དང་། །སློབ་པ་བསད་པ་དང་། །དགེ་འདུན་འདུ་པའི་17 སྒོ་ཕྲོགས་པ་18 དང་ 19-། །-19 མཆོད་ [1a5, J321a2]རྟེན་འཇིག་ 20-པ་པའོ། ། [1a6]། །ཆོས་ཀྱི་རྣམ་གྲངས་ཀྱི་བརྗེད་བྱང་། །འཇིག་རྟེན་འདོག་པ། །ཆོས་...21 -20

<T2: Stein 609, T3: Pelliot 121>

I.

[1a1, *T3.22a1*] 1-༄།། །།ཆོས་ཀྱི་རྣམ་གྲངས་ཀྱི་2 མདོར་བསྟན་པ་འོ། །-1 དེ་3 དཀོན་མཆོག་གསུམ་ [*T3.22a2*]གང་ཞེ་4 ན། །སངས་རྒྱས་དཀོན་མཆོག་དང་། ཆོས་དཀོན་ཆོག་5 [1a2]དང་། དགེ་ [*T3.22a3*]འདུན་6 མཆོག་ 7-སྟེ་8 ། །འདི་གསུམ་ནི་9 དཔེར་ན། །འཇིག་རྟེན་གྱི་ནོར་བུ་ [*T3.22a4*]རིན་པོ་ཆེ་འི་[sic]རྒྱལ་པོ་ 10-ནི།-10 ནོར་གྱི་དབྱིག་11 སྟེ།12 དཀོན་ལ་རིན་ཆེ་13 བཞིན་14 དུ། 15-དཀོན་ལ་ [1a3]མཆོག་ཀྱང་-15 དཀོན་ལ་རིན་ཆེ་སྟེ། ཅིའི་16 ཕྱིར་ཞེ་ན་ 17-། སྐལ་-17 པ་ 18-གྲངས་པར་ཡང་།-18 འཇིག་ [*T3.22b1*]རྟེན་དུ་མྱི་འབྱུང་སྟེ། བརྒྱ་ལམ་བརྒྱ་ལམ་ན། མེན་[sic]ཏོག་ཨུ་དུམ་ 19-འབར་ [1a4]བ་-19 དང་འདྲ་བར།20 [*T3.22b2*]འབྱུང་བས་ན།21 དཀོན་ལ་རིན་ཆེ་བ་ནི་ 22-། ། ད་-22 ལྟར་ལན་འགའ་ཞིག་འཇིག་རྟེན་དུ་གཤེགས་ [*T3.22b3*]པའི་ཚེ་ན། སེམས་ཅན་23 ཐམས་ཅད་24 [1a5]སྐྱེ་ཤི་25 སྡུག་བསྔལ་གྱི་26 རྒྱ་མཚོ་ལས་སྒྲོལ་ 27-བའི་ཕྱིར་ [*T3.22b4*] རིན་ཆེ།-27 28-མཆོག་ནི་-28 འཇིག་རྟེན་དང་།29 འཇིག་རྟེན་ལས་འདས་པའི་30 མཆོག་ [*T3.22b5*]ཡིན་བས་31 མཆོག་ཅེས་བྱའོ། །

I-i.

[1a6]དེ་ལ་གསུམ་ཞེས་བྱ་བ་ནི། ཚུལ་གཅིག་པའི་དཀོན་ [*T3.23a1*]མཆོག་གསུམ་དང་། གནས་32 ཐ་33 དད་པའི་34- དཀོན་མཆོག་གསུམ་དང་། སྐུ་གཟུགས་བརྟན་གྱི་-34 དཀོན་མཆོག་གསུམ་མོ། ། [1b1]དེ་ལ་ཚུལ་གཅིག་35 པའི་ [*T3.23a2*]དཀོན་མཆོག་གསུམ་གང་ཞེ་ན། དོན་དམ་པར་རོ་གཅིག་36 པ་སྟེ། དམིགས་37 སུ་མེད་པ་ནི། [*T3.23a3*]སངས་རྒྱས་38 ཆོས་ཀྱི་སྐུ། དེ་ཉིད་39 བྱ་བ་མེད་པའ་40 ནི། དམ་པའི་ཆོས་ཀྱི་41 ངོ་བོ་ཉིད་42 ། དེ་ལ་ [1b2, *T3.23a4*]འདུས་མ་བྱས་པ་ནི་དགེ་འདུན་ 43-སྟེ།-43 འདི་ནི་44 དོན་དམ་པའི་དཀོན་ཆོག་45 གསུམ་རོ་ [*T3.23a5*]གཅིག་པའོ།

I-ii.

དེ་ལ་གནས་46 ཐ་དད་པའི་དཀོན་མཆོག་གསུམ་གང་ཞེ་ན། 47-འོག་མིན་གི་གནས་ན། ལོངསྤྱོད་[sic]རྫོགས་ [1b3]པའི་སྐུ། དཔལ་རྣམ་པར་སྣང་མཛད་ནི་སངས་རྒྱས་དཀོན་མཆོག་གོ། གསང་བ་གསུམ་སྟེ། མྱི་རྟག་མྱི་གཡོ་མྱི་གསུང་བ་ནི། ཆོས་དཀོན་མཆོག་གོ། བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་རྣམས་ནི། དགེ་འདུན་ [1b4]དཀོན་མཆོག་གོ། །འཛམ་བུ་གླིང་ན་-47 སྤྲུལ་པའི་སྐུ་ 48-། ཤག་ཀྱ་ཐུབ་པ་ནི་-48 སངས་རྒྱས་དཀོན་མཆོག་གོ།49 50-བྱང་ཆུབ་ཀྱི་ཕྱོགས་ཀྱི་ཆོས་སུཾ་[sic]ཅུ་རྩ་བདུན་ནི། ཆོས་དཀོན་མཆོག་གོ། ། [1b5]འཕགས་པ་དགྲ་བཅོམ་བའི་དགེ་འདུན་རྣམས་ནི། དགེ་འདུན་དཀོན་མཆོག་གོ། །

I-iii.

དེ་ལ་སྐུའི་གཟུགས་བརྟན་གྱི་དཀོན་མཆོག་གསུམ་གང་ཞེ་ན། ། རིན་པོ་ཆེ་དང་། [1b6]ཤིང་དང་འཇི་བ་ལས་སྒྲུབས་པ་ལ་

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

བྱས་པའི་གཟུགས་ནི། སངས་རྒྱས་དཀོན་མཆོག་གོ། ། [T3.23b4]གསུང་རབས་མདོ་[-50] སྡེ་བཅུ་ [51-]གཉིས། སྡེ་སྣོད་གསུམ་དུ་བསྡུས་པ་[-51] ནི་ཆོས་དཀོན་མཆོག་ [1b7]གོ།[52] གང་ཟག་ [T3.24a1]གི་[53] དགེ་འདུན་[54] [55-]སློང་གསོལ་བ་དང་བཞིའི་ལས་ཀྱིས། བསྙེན་པ་རྫོགས་པ། ཡུལ་གྱི་དབུས་ན་ཉི་ཤུ་རྩ་གཅིག། མཐའ་འཁོབ་ན་[-55] བཞི་[56] ཡན་ཅད་[57] ནི་ [58-]། དགེ་[-58] འདུན་ [59-]མཆོག་གོ།[-59]

I-iv.

[1b8]དེ་ལ་གནས་[60] [T3.24a2]ཐ་དད་པའི་དཀོན་མཆོག་[61] གསུམ་གསུམ་[62] ཡང་། ཀུན་རྫོབ་དུ་[63] སེམས་འཁྲུལ་[T3.24a3]པའི་བག་ཆགས་ལ།[64] སྒྱུ་མ་སྤྲུལ་པ་[65] གཟུགས་བརྙན་བྲག་ཆ་[66] དང་འདྲ་བར་སྣང་སྟེ། ། [T3.24a4]དོན་དམ་པར་[1b9]རང་ [67-]བཞིན་གྱིས་[-67] མ་བྱུང་མ་སྐྱེས།[68] རྣམ་པར་དག་[69] སྟེ། ཆོས་ཀྱི་[70] སྐུ་དང་ཐ་མི་[T3.24a5]དད་དོ། །[-7]

II-i-i-i.

[71-]དེ་ལ་འཁམས་[72] གསུམ་དང་[73] ། ལམ་རྒྱུ་[74] དྲུག་ལ།[-71] [75] འདོད་པའི་ཁམས་དང་།[76] [T3.24b1] [77-]གསགཟུག་ཀྱི་འཁམས་[-77] དང་ [78-]། [2a1]གཟུགས་མེད་པའི་ [79-]འཁམས་སོ།[-79] [-78] [80-]དེ་ལ་འདོད་པའི་འཁམས་[81] [T3.24b2]ཅི་[82] ལྟ་བུ་ཞེ་ན། འདོད་པའི་འཁམས་[83] གནམ་རིམ་[84] པ་དྲུག་མན་ཆད་[85] དང་། སེམས་ཅན་དམྱལ་ [T3.24b3]བ་ཡན་ཆད་[86] འདོད་པ་ལྔའི་ཡོན་ཏན་[2a2]ལ་སྤྱོད་པས་ [87-]། །[-87] གནམ་རིམ་པ་མཐོན་དམན་དུ་སྐྱེས་[88] [T3.24b4]ཏེ་ [89-]། །[-89] [90-]དེའི་ཕྱིར་ན་[-90] འདོད་པའི་ [91-]འཁམས་ཞེས་[-91] བྱའོ། །ཡང་གཅིག་[92] དུ་ན། དེའི་[93] རྒྱུ་དང་འབྲས་བུ་ནི། [T3.24b5]མི་[94] དགེ་བ་བཅུ་སྤྱོད་པས་[95] ངན་སོང་གསུམ་དུ་ལྟུང་ངོ་།[96] དགེ་བ་བཅུ་[2a3]མཐོན་དམན་[97] [T3.25a1]དུ་སྤྱད་པས།[98] ལྷ་དང་མིའི་[99] གནས་སུ་ [100-]སྐྱེས་སོ། །[-100] [-80]

II-i-i-ii.

དེ་ལ་དགེ་བ་བཅུ་གང་ཞེ་ན། ལུས་ལ་ [T3.25a2]གསུམ། ངག་ལ་བཞི་[101] ། ཡིད་ལ་གསུམ་སྟེ་[102] བཅུའོ། དེ་ལ་ལུས་[103-]ལ་གསུམ་[-103] [T3.25a3]གང་ཞེ་ན། གསྲོག་[104] [105-]མི་གཅོད་།[-105] [2a4]མ་བྱིན་[106] བར་མི་ལེན། ལོག་པར་མི་[107] གཡེམ་བ་དང་གསུམ་[108] [T3.25a4]མོ།[109] ངག་ [110-]གི་བཞི་[-110] གང་ཞེ་ན།[111] བརྫུན་དུ་ [112-]མི་སྨྲ་བ་དང་།[-112] [113-]འཕྲ་མར་མི་སྨྲ།[-113] ངག་ [T3.25a5]རྩུབ་པོར་[114] མི་སྨྲ། ཚིག་[115] ཁྱལ་བར་མི་[116] སྨྲ་བ་དང་བཞི་[117] འོ། [118-]ཡིད་ཀྱི་གསུམ་[-118] [119] གང་ [2a5]ཞེ་ན། །ངན་དུ་མི་སེམས། ཆགས་པར་མི་སེམས། ལོག་པར་མི་ལྟ་བ་དང་གསུམ་སྟེ་བཅུའོ། །དེ་ནི་རྒྱུ་དང་འབྲས་བུའོ།

II-i-ii.

དེ་གཟུགས་ཀྱི་ཁམས་ཅི་ལྟ་བུ་ཞེ་ན། འཇིག་རྟེན་གྱི་བསམ་ [2a6]གཏན་རྟོག་དཔྱོད་དང་། དགའ་བདེ་བཏང་སྙོམས་བཞི་བསྒོམས་བས། བསམ་གཏན་དང་པོ་དང་། གཉིས་པ་དང་། གསུམ་པ་དང་། བཞི་པ་སྟེ། གཟུགས་ཀྱི་འཁམས་ཀྱི་གནམ་རིམ་པ་བཅུ་ [2a7]གཉིས་ཀྱི་ལྷ་རྫུས་ཏེ་སྐྱེས་སྟེ། འདོད་པ་ལྔའི་ཡོན་ཏན་ལ་སྤྱོད་པ་ནི་མེད་ཀྱི། འཏིང་[sic]ངེ་འཛིན་གྱི་བདེ་བ་ཙམ་ལ་གནས་ཤིང་། ལུས་གཟུགས་ཙམ་ཞིག་ཡོད་པའི་ཕྱིར། གཟུགས་ཀྱི་འཁམས་ [2a8]ཞེས་བྱ་བའོ། །དེའི་རྒྱུ་ནི་བསམ་གཏན་དང་ཚད་མེད་པའོ། །འབྲས་བུ་ནི་ཏིང་ངེ་འཛིན་གྱི་བདེ་བ་དང་། མངོན་བར་ཤེས་པ་ལྔའོ། །དེའི་གོང་ན་གཙང་མའི་རིགས་ལྔའི་གནས་ཞེས་བྱ་བ་ནི། མི་ཆེ་བ་དང་། མི་གདུང་ [2a9]བ་དང་། ཤིན་དུ་མཐོང་དང་། གྱ་ནོམ་སྣང་དང་། འོག་མིན་ཏེ། སེམས་ཅན་གྱི་གནས་ལ། །འཕགས་པ་རྣམས་བཞུགས་པའི་ཕྱིར་ན། གཙང་མའི་གནས་ཤེས་བྱ་སྟེ། སྤྱིར་གནམ་རིམ་པ་བཅུ་བདུན་ [2a10]ནོ།

II-i-iii.

[120-]དེ་ལ་གཟུགས་མེད་པའི་འཁམས་ཅི་ལྟ་བུ་ཞེ་ན། འཇིག་རྟེན་གྱི་བསམ་གཏན་རྣམ་ཤེས་མཐའ་ཡས་སྐྱེ་མཆེད་

NII-Electronic Library Service

དང་།[-120] ནམ་ཀའ་[121] མཐའ་ཡས་ [J.313b5]སྐྱེ་མཆེད་ [122-]དང་།[-122] [123-]ཡོད་མྱིན་མེད་མྱིན་སྐྱེ་[124] མཆེད་ [2b1]དང་། ཅུང་ཟད་མེད་མྱིན་སྐྱེ་མཆེད་བཞི་བསྒོམས་པས། ལུས་གཟུགས་མེད་ཀྱི། །ཏིང་ངེ་འཛིན་གྱི་འབྲས་བུའི་བདེ་བ་ལ་ཡོད་ཀྱི་རྣམ་པར་ཤེས་པ། རྩེག་[sic]གཅིག་དུ་གནས་ཤིང་། སྐལ་པ་བརྒྱད་ཁྲི་ [2b2]མན་ཅད་[sic]ཀྱི་བར་དུ་གནས་ཀྱང་། །ལུས་གབཟུགས་[sic]དང་དབང་པོ་ཡན་ལགི་[sic]མྱི་ལྡན་བས། ཆོས་ཐོས་པའི་སྐལ་བ་ཡང་མེད་དེ། བགེགས་ཀྱིས་ན་གནས་པ་འདི་ནི།[-123] གཟུགས་ [125-]མེད་པའི་འཁམས་ཤེས་བྱ་སྟེ། [2b3]གནམ་རིམ་པ་བཞི་འོ། །[-125]

II–ii.

[126-]དེ་ལྟམ་[127] རྒྱུ་དྲུག་གང་ཞེ་ན། །ངན་སོང་གསུམ་དང་། ལྷ་དང་མྱི་དང་། ལྷ་མ་ཡིན་དང་དྲུག་གོ། ལམ་རྒྱུད་ལྔར་བགྲང་ན། ལྷ་མ་ཡིན་དཡི་[sic]དགས་ཀྱི་འཁམས་སུ་བསྡུ། ། [2b4]ལམ་རྒྱུ་དྲུག་དུ་སྐྱེ་བ་ནི། །[-126] [128-]གནས་བཞི་ལས་སྐྱེས་ཏེ།[-128] གང་ཞེ་ན། །མངལ་ནས་ [J.317b6]སྐྱེ་བ་དང་། སྒོང་ལས་ [129-]སྐྱེས་པ་[-129] དང་། དྲོད་གཤེར་ལས་སྐྱེ་བ་དང་། རྫུས་[130] ཏེ་ [131-]སྐྱེ་བ་དང་བཞི་འོ། །[-131] དེ་ལ་ [132-]མངལ་ནས་སྐྱེས་ [2b5]པ་ནི།[-132] མྱི་དང་ཕྱུགས་ [133-]ལྟ་བུ་འོ།[-133] [134-]སྒོང་ལས་སྐྱེ་བ་ནི།[-134] བྱ་དང་ཉ་ [135-]ལྟ་བུ་འོ།[-135] [136-]དྲོད་གཤེར་ལས་སྐྱེ་བ་ནི། གྲོག་སྦྲུར་ལྟ་བུ་འོ།[-136] [137-]རྫུས་ཏེ་སྐྱེ་བ་ནི།[-137] ལྷ་[138] དང་ [139-]འདྲེ་དང་། སེམས་ཅན་དམྱལ་བ་ [2b6]ལྟ་བུ་འོ། །[-139]

II–iii.

དེ་ལ་འཁམས་གསུམ་དུ་ཅིས་འཁོར་ཞེ་ན། འདོད་ཆགས་ཞེ་སྡང་གཏི་མུག་གསུམ་གྱིས་འཁོར་རོ། དེ་ལ་འདོད་ཆགས་ཅི་ལྟ་བུ་ཞེ་ན། འདོད་པ་ལྔའི་ [2b7]ཡོན་ཏན་ལ། ཆགས་ཤིང་སྲེད་པ་ནི། འདོད་ཆགས་སོ། །ཞེ་སྡང་ཅི་ལྟ་བུ་ཞེ་ན། དེ་དང་མྱི་མཐུན་པའི་ཕྱོགས་ལ། ཞེ་སྡང་བ་ནི་ཞེ་སྡང་ངོ་། གཏི་མུག་ཅི་ལྟ་བུ་ཞེ་ན། [2b8]འདི་གཉིས་[sic]རང་བཞིན་མེད་ཅིང་རྣམ་པར་མྱི་ཤེས་པ་ནི་གཏི་མུག་གོ། འདི་གསུམ་ནི་དུག་གསུམ་ཞེས་ཀྱང་བྱ། །འཁོར་བའི་རྩ་བ་ཞེས་ཀྱང་བྱ། །འདི་གསུམ་སྤངས་པས། མྱ་[sic]ངན་[2b9]མྱ་ངན་ལས་འདས་ཏེ། མྱ་ངན་ལས་འདས་པ་ནི། ཉན་ཐོས་དང་། རང་རྒྱལ་དང་། ཐ་[sic] ཐེག་པ་ཆེན་པོའི་མྱ་ངན་ལས་འདས་པའོ། །

II–iii–i.

དེ་ལ་ཉན་ཐོས་རང་རྒྱལ་ནི་དུག་གསུམ་སྤོང་ཞིང་། [2b10]མྱི་ངན་ལས་འདས་པ་ནི། །དུག་གསུམ་ཉིད་རང་བཞིན་མེད་ཅིང་། རྣམ་པར་དག་པར་ལམ་ཤེས་པས། གཉེན་པོས་ཐབས་སྣ་ཚོགས་ཀྱིས། ད།[140] དུག་གསུམ་བཀག་ནས། །མྱི་ངན་ལས་འདས་[3a1]པའི་ཞི་བ་ཕྱོགས་གཅིག་ལ་གནས་ཏེ། །བླང་དོར་གྱི་ཤེས་རབ་དུ་གྱུར་པའོ། །

II–iii–ii.

དེ་ལ་ཐེག་པ་ཆེན་པོའི་མྱི་ངན་ལས་འདས་པ་ནི། །དུག་གསུམ་ཉིད་རྣམ་པར་དག་ཅིང་། མ་བྱུང་མ་སྐྱེས་པར་ཡང་དག་པར་རྟོ་[141] ཤེས་རབ་ཀྱིས། ། [3a2]ཡང་དག་པ་ཅི་ལྟ་བ་བཞིན་དུ། སོ་སོ་རང་གི་བློས་རིག་ནས། །བླང་དོར་མེད་པ། ཅི་ལ་ཡང་མྱི་གནས་པའི་མྱི་ངན་ལས་འདས་པའོ།

III.

དེ་ལ་རྣམ་པར་ཤེས་པ་ཅི་ལྟ་བུ་ཞེ་ན། །རྣམ་པར་ཤེས་པ་བརྒྱད་ཅེས་ཀྱང་བྱ། གསུམ་ [3a3]ཞེས་ཀྱང་བྱ། གཉིས་ཞེས་ཀྱང་བྱ། གཅིག་ཅེས་ཀྱང་བྱའོ། དེ་ལ་བརྒྱད་གང་ཞེ་ན། །སྒོ་ལྔའི་རྣམ་པར་ཤེས་པ་དང་། ཡིད་ཀྱི་རྣམ་པར་ཤེས་པ་དང་། ཉོན་མོངས་པའི་ཡིད་དང་། ཀུན་བཞི་[sic]རྣམ་པར་ཤེས་པ་དང་བརྒྱད་དོ། །

Japanese Association for Tibetan Studies

III-i.

[3a4]རྣམ་པར་ཤེས་པ་གསུམ་གང་ཞེ་ན། །སྒོ་ལྔའི་རྣམ་པར་ཤེས་པ། ཡིད་ཀྱི་རྣམ་པར་ཤེས་པའི་ནང་དུ་བསྡུས་ནས། ། ཡིད་ཀྱི་ནམ་པར་ཤེས་པ་དང་། ཉོན་མོངས་པའི་ཡིད་དང་། ཀུན་བཞི[sic]རྣམ་པར་ཤེས་པ་དང་ [3a5]གསུམ་མོ།

III-ii.

ན།[sic] རྣམ་པར་ཤེས་པ་གཉིས་གང་ཞེ་ན། སྣང་བའི་རྣམ་པར་ཤེས་པ་དང་། སྣང་བ་ལ་དང་དངོས་པོ་སོ་སོར་རྟོག་པའི་རྣམ་པར་ཤེས་པའོ། །དེ་ལ་སྣང་བའི་ནརྣམ་[sic]པར་ཤེས་པ་ཞེས་ [3a6]བྱ་བ་ནི། ཐོག་མ་མྱེད་པའི་དུས་ཀྱི་སྒོམས་པའི་བག་ཆགས། འཁཁམས་[sic]སུམ་གྱི་ཆོས་སྣ་ཚོགས་ཀུན་གཞི་ལ་སྣང་བའི་ཕྱིར་ན། སྣང་བའི་རྣམ་པར་ཤེས་པ་ཞེས་བྱའོ། །སྣང་བའི་ཡུལ་དེ་ལ། ། རྣམ་པར་ཤེས་ [3a7]པ། ལྷག་མ་བདུན་གྱིས་གཟུང་བ་དང་། འཆད་[142] འཛིན་པའི་ཚུལ་དུ། དངོས་པོར་སོ་སོར་རྟོག་པའི་ཕྱིར་ན། ། སྣང་བའི་དངོས་པོར་སོ་སོར་རྟོག་པའི་རྣམ་པར་ཤེས་པ་ཞེས་བྱའོ། །

III-iii.

རྣམ་པར་ཤེས་པ་གཅིག་གང་ [3a8]ན། ཀུན་དུ་གཞི་ལ་བྱ་སྟེ། ཅིའི་[sic]ཕྱིར་ཞེ་ན། ཀུན་གཞི་རྒྱ་མཚོ་ལྟ་བུ་ཡིན་ལ། རྣམ་པར་ཤེས་པ་གཞན་ནི། རླབས་ལྟ་བུ་ཡིན་བས། །ཀུན་གཞི་རྒྱ་མཚོ་མྱི་གཡོ་ན། རྣམ་པར་ཤེས་པའི་ [3b1]རླབས་མྱི་འབྱུང་བས། གཅིག་ཅེས་བྱའོ། །

III-iv.

དེ་ལ་མུ་སྟེགས་རྣམས་ཀྱིས་ནི། སྒོ་ལྔའི་རྣམ་པར་ཤེས་པ་བཀག་[143] ནས་མྱི་ངན་ལས་འདའ་བར་ལྟ། ཉན་ཐོས་དང་རང་སངས་རྒྱས་རྣམས་ཀྱིས་ནི། །ཡིད་ཀི་རྣམ་ [3b2]པར་ཤེས་པ་བཀག་ནས་མྱི་ངན་ལས་འདས་པར་ལྟ། །བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་རྣམས་ཀྱིས་ནི། །ཀུན་གཞི་རྒྱ་མཚོ་བསྐམས་པར་མྱི་ངན་ལས་འདས་པར་ལྟ།

III-iv-i.

དེ་ལ་ཀུན་གཞི་འི་ལས་ནི་རྣམ་པར་ [3b3]ཤེས་པ་ཐམས་ཅད་དང་། ལས་དང་ཉོན་མོངས་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱིས། གཞི་འམ། སྣོད་དམ། མཛོད་ལྟ་བུའོ། །

III-iv-ii.

ཉོན་མོངས་པའི་ཡིད་ནི། ཀུན་གཞི་ལ་ཡང་བདག་དུ་ལྟ་ཞིང་། བགས་[sic]ཆགས་སྨོགས་ [3b4]པར་བྱེད་ལ། ཕྱི་རོལ་དུ རྣམ་པར་ཤེས་པའི་གྲོགས་སུ་ཡང་གྱུར་པརད་[sic]། །སླུལ་ཁ་གཉིས་ལྟ་བུ་སྟེ། །ཕྱུག་ཙང་[sic]ངམ་མཛོད་པ་ལྟ་བུ་སྟེ། བདག་དུ་ང་རྒྱལ་བ་ལ་སྨོགས་པའ་[sic]། །འཁོར་བཞིས་[sic]བསྐོར་ [3b5]པའོ།

III-iv-iii.

ཡིད་ཀྱི་རྣམ་པར་ཤེས་པ་ནི། རྣམ་པར་ཤེས་པ་ལྔའི་ཚོགས་ལ། དགེ་བ་དང་མྱི་དགེ་བར་སེམས་པ་སྟེ། སྒོ་ལྔའི་བག་ཆགས་བསྡུས་ནས། །ཉོན་མོངས་པའི་ཡིད་ལ་གཏད་ཅིང་བཙངས་ནས། [3b6]ཉོན་མོངས་པའི་ཡིད་ཀྱིས་ཀུན་གཞི་བསྒྲུན་ཏེ། མྱི་སྟོར་བར་བྱེད་པའི་ཕྱིར། ཡིད་ཀྱི་རྣམ་པར་ཤེས་པ་ནི་ནོར་བདག་གམ། ཚོང་དཔོན་ནམ། རྒྱལ་པོ་ལྟ་བུ་ཡིན་ནོ། །

III-iv-iv.

སྒོ་ལྔའི་རྣམ་ [3b7]པར་ཤེས་པ་ནི། རྣམ་པར་ཤེས་པ་སྐད་ཅིག་མས། ཕྱི་འི་ཡུལ་ལ་སོ་སོར་དམྱིགས་ནས། བག་ཆགས་ཡིད་ཀྱི་རྣམ་པར་ཤེས་པ་ལ་བསྒོགས་ཤིང་འབུལ་བའི་ཕྱིར་ན། །ཚོང་པ་འམ་དཔྱ་པ་ལྟ་ [3b8]བུ་ཡིན་ནོ།

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

III-iv-v.

དེ་ལ་རྣམ་པར་ཤེས་པ་སྐད་ཅིག་མ་ལྟ་བུ་ཅི་ཞེ་ན། །ཀུན་བའི་[sic]བག་ཆགས། ཉོན་མོངས་པའི་ཡིད་ལ་སྨོགས་པ། རྣམ་པར་ཤེས་པ་བདུན་རྣམས། མཚོའི་རླབས་ལྟར་ཕྱིའི་ཡུལ་ [3b9]ལ་འཇུག་ཅིང་གཡོ་བ་ནི། །སྐད་ཅིག་མ་ཞེས་བྱ། རྣམ་པར་ཤེས་པ་ཞེས་ཀྱང་བྱ། ལས་དང་ཉོན་མོངས་པ་ཞེས་ཀྱང་བྱ། ཅག་[sic]གསུམ་ཞེས་ཀྱང་བྱ་སྟེ། །རྣམ་གྲངས་སྣ་ཚོགས་སུ་བཏགས་སོ། ། [3b10]ཀུན་གཞི་སྙི་གཡོ་ན་རླབས་མཚོར་གྱུར་པ་དང་འདྲ་སྟེ། །ཉོན་མོངས་པའི་རྣམ་པར་ཤེས་པ་སྐ་[sic]ཅིག་མ། །ཐམས་ཅད་དེ་བཞིན་ཉིད་དང་། ཡང་དག་པའི་ཡེ་ཤེས་སུ་གྱུར་ཏེ། །སངས་རྒྱས་ཀྱི་ [4a1]རང་བཞིན་ནོ། འདི་ནི་སོ་སོ་རང་གྲིས་རིག་པའི་ཡུལ་ཏེ། །རྟོག་པ་ཅན་ཐམས་ཅད་ཀྱི་ཡུལ་མ་ཡིན་ནོ། །

IV.

དེ་ལ་[144] ཕུང་པོ་ [145-]ལྔ་གང་ཞེ་ན། །[-145] [146-]གཟུགས་ཀྱི་ཕུང་པོ་དང་། ཚོར་བའི་ཕུང་པོ་དང་། [4a2]འདུ་ཤེས་ཀྱི་ཕུང་པོ་དང་། འདུ་བྱེད་ཀྱི་ཕུང་པོ་དང་། རྣམ་པར་ཤེས་པའི་ཕུང་པོའོ་[sic]། དེ་ལ་[-146] གཟུགས་ཀྱི་ཕུང་པོ་གང་ [147-]ཞེ་ན། །[-147] འབྱུང་བ་ཆེན་པོ་བཞི་དག་རྒྱུར་བྱས་པའོ་[148] ། ཚོར་བའི་ཕུང་པོ་གང་ཞེ་ན། ། [4a3] [149]བདེ་བ་དང་སྡུག་བསྔལ་བ་[150] དང་། [151-]གཉི་ག་མ་ཡིན་བའི་ཚོར་བའོ། །[-151] [152-]འདུ་ཤེས་ཀྱི་ཕུང་པོ་གང་ཞེ་ན། །ཡུལ་ལ་མཚན་མར་འཛིན་པ་སྟེ། དགེ་བ་དང་མི་དགེ་བ་དང་། ལུང་དུ་མི་སྟོན་པའི་འདུ་ཤེས་སོ། [4a4]འདུ་བྱེད་གང་ཞེ་ན། བསོད་ནམས་སུ་ཉེ་བར་འགྲོ་བའི་འདུ་བྱེད་དང་། །བསོད་ནམས་ལམ་[sic]ཡིན་བར་ཉེ་བར་འགྲོ་བའི་འདུ་བྱེད་དང་། །མི་གཡོ་བར་འགྲོ་བའི་འདུ་བྱེད་དང་གསུམ་མོ། །རྣམ་པར་ [4a5]ཤེས་པ་གང་ཞེ་ན། སྒོ་ལྔའི་རྣམ་པར་ཤེས་པ་དང་། ཡིད་དང་། ཉོན་མོངས་པའི་ཡིད་དང་། །ཀུན་གཞི་དང་བརྒྱད་དོ། །ཕུང་ [153-]པོ་འདི་[-153] ལྔའི་མཚན་ཉིད་ལ། སོ་སོའི་སྐྱེ་བོའ་[sic]དང་། མུ་སྟེགས་ [4a6]ཅན་རྣམས་ནི། །བདག་དང་བདག་གི་དང་། རྟག་པ་དང་ཆད་པར་དམིགས་སོ། །ཉན་ཐོས་དང་རང་སངས་རྒྱས་ནི། མི་རྟག་པ་དང་། སྡུག་བསྔལ་བ་དང་། བདག་མེད་པ་དང་། དོན་དམ་པར་ [4a7]ཞི་བ་དང་མྱ་ངན་ལས་འདས་པར་དམིགས་སོ། །ཐེག་པ་ཆེན་པོའི་རིགས་ཅན་རྣམས་ཀྱིས་ནི། །ཀུན་རྫོབ་དུ་སྒྱུ་མ་སྤྲུལ་པ། གཟུགས་བརྙན་བྲ་[sic]ཆ། ཆུ་ཟླ་དང་འདྲའ་བར་མ་ཐོང་། [154-]ཐེག་པ་ཆེན་པོའི་[-154] [4a8]དོན་དམ་པར་བཏང་[sic]བཞིན་མེད། དུས་གསུམ་དུ་སྐྱེ་འགག་མེད་པ། ནམ་ཀའི་[sic]དབྱིངས་དང་འདྲ་བར། ཡང་དག་པའི་ཤེས་རབ་ཀྱིས། ཡང་དག་པ་ཅི་ལྟ་བ་བཞིན་དུ། མི་མཐོང་བའི་ཚུལ་གྱིས་ [4a9]མཐོང་ངོ་། །[-152]

V.

[155-]དེ་ལ་འཁམས་[-155] བཅོ་བརྒྱད་གང་ཞེ་ན་[156] ། ། [157-]དབང་པོ་དྲུག་ཡུལ་དྲུག། རྣམ་པར་ཤེས་པ་དྲུག་སྟེ་[-157] བཅོ་བརྒྱད་དོ། །

V-i.

དེ་ལ་དབང་པོ་དྲུག་ [158-]གང་ཞེ་ན། །དམིག་གི་དབང་པོ། གཟུགས་ཐམས་ཅད་ [4b1]ལ་དབང་བའི་[sic]ཕྱིར། དབང་པོ་ཞེས་བྱ་སྟེ། དེ་བཞིན་དུ་རྣ་བ་སྒྲ་ལ་དབང་། སྣ་དྲི་ལ་དབང་། ལྗེ་རོ་ལ་དབང་། ལུས་རེག་འཇམ་ལ་དབང་། ཡིད་ཆོས་དགེ་སྡིག་ལ་དབང་། བའི་[sic]ཕྱིར་ན་དབང་པོ་ཞེས་བྱའོ། ། [4b2]དམིག་གི་དབང་པོ་ཟར་མ་ཁ་བྱེ་དང་འདྲ། །རྣ་བའི་དབང་པོ་གྲོ་བ་གཙུས་ཏེ་བཅད་པ་འདྲ། །སྣའི་དབང་པོ་ནི། སོ་གབ་གཤིབས་པ་འདྲ། ལྗེའི་དབང་པོ་ནི། ཟླ་བ་ཁམ་བ་འདྲ། །ལུས་ཀྱི་དབང་པོ་ནི་ [4b3]ཡ་ལང་ཞུབ་གྲོན་བ་འདྲ། །ཡིད་ཀྱི་དབང་པོ་ནི། སྦྲིའུ་སྐར་ཀུང་[sic]གཅིག་ནས་གཅིག་དུ་འབྱུང་བ་འདྲའོ། །[-158]

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

V–ii.

དེ་ལ་ཡུལ་དྲུག་གང་ཞེ་ན། །དབང་པོ་དེ་དྲུག་གི་ཡུལ་ཏེ། །གཟུགས་དང་། [4b4]སྒྲ་ལས་བསྒྲོགས་པ་དྲུག་གོ། །རྣམ་པར་ཤེས་པ་དྲུག་གང་ཞེ་ན། །དབང་པོ་དེ་དྲུག་གི་ཡུལ་གྱི་མཚན་ཉིད་དེ། སོ་སོ་ནས་མ་ནོར་བར་ཕྱེ་བྲག་དུ་འབྱེད་ཅིང་ཤེས་པ་ལ་ནི། རྣམ་པར་ [4b5]ཤེས་པ་དྲུག་ཅེས་བྱའོ། །དེ་ལྟར་དབང་པོ་དྲུག་ཡུལ་དྲུག། རྣམ་པར་ཤེས་པ་དྲུག་སྟེ། །དྲུག་གསུམ་བཅོ་བརྒྱད་ལ་འཁམས་བཅོ་བརྒྱད་ཅེས་ཀྱང་བྱའོ། དབང་པོ་དྲུག་ཡུལ་དྲུག་ [4b6]ལ་སྐྱེ་ཞིང་མཆེད་པས་ན། །སྐྱེ་ཆེད་[sic]བཅུ་གཉིས་ཞེས་ཀྱང་བྱའོ། །ཁམས་བཅོ་བརྒྱད་དང་། སྐྱེ་མཆེད་བཅུ་གཉིས་ཀྱི་སྒོ་ནས། །ལས་དགེ་སྡིག་གི་འབྲས་ [4b7]བུ་བ་སྐུགས་པས། གནས་མཐོང་[159] མན་དུ་སྐྱེ་འོ། །དགེ་བ་དང་སྡིག་པར་ཡང་མྱི་དམྱིགས། །ཞི་བ་ལ་ཡང་མྱི་གནས་པ་ནི། མྱི་ངན་ལས་འདས་པ་ཆེན་པོར་འགྱུར་རོ། །

VI.

[4b8]དེ་ལ་རྟེན་འབྲེལ་བཅུ་གཉིས་གང་ཞེ་ན། །མ་རིག་པའི་རྐྱེན་གིས་འདུ་བྱེད། འདུ་བྱེད་ཀྱི་རྐྱེན་གྱིས་རྣམ་པར་ཤེས་པ། རྣམ་པར་ཤེས་པའི་རྐྱེན་གྱིས། མྱིང་དང་གཟུགས།

<T4: Pelliot 602>

[1a1]༄། །མྱིང་དང་གཟུགས་ཀྱི་རྐྱེན་གིས། སྐྱེ་མཆེད་དྲུག་[sic]། སྐྱེ་མཆེད་དྲུག་ཀྱི་རྐྱེན་གིས། རེག་པ། རེག་པའི་རྐྱེན་གྱིས་ཚོར་བ། ཚོར་བའི་རྐྱེན་གྱིས་སྲེད་པ། །སྲེད་པའི་རྐྱེན་ [1a2]གྱིས། ལེན་པ། །ལེན་པའི་རྐྱེན་གྱིས་སྲིད་པ། །སྲིད་པའི་རྐྱེན་གིས། སྐྱེ་བ་དང་། རྒ་བ་དང་། འཆི་བ་དང་། སྡུག་བསྔལ་གི་ཕུང་པོ་ཆེན་པོ་འབའ་ཤིག་[sic]འབྱུང་བར་འགྱུར་རོ། ། [1a3]མ་རིག་པས་འགག་[sic]ན། རྒ་ཤིའི་བར་དུ་འགག་པར་འགྱུར་རོ། །སོ་སོའི་སྐྱེ་བོ་དང་། མུ་སྟེགས་རྣམས་ཀྱིས་ནི། མ་རིག་པའི་མཚན་ཉིད་ལ། བདག་དང་བདག་གིར་ [1a4]ཆགས་ཤིང་དམྱིམ་[sic]པས། །འཁམས་[sic]གསུམ་དུ་འཁོར་རོ། །ཉན་ཐོས་དང་རང་སངས་རྒྱས་རྣམས་ཀྱིས་མ་རིག་པ་བཀག་པས། མྱི་ངན་ལས་འདས་པར་ལྟའོ། ། [1a5]ཐེག་པ་ཆེན་པོས་[sic]རྣམས་ཀྱིས་ནི། མ་རིག་པ་ཉིད། རང་བཞིན་གྱིས་མ་བྱུང་། མ་སྐྱེས་པར་བསྒོམ་པའི་ཤེས་རབ་ཀྱིས། །ཡང་དག་པ་ཅི་ལྟ་བ་བཞིན་དུ། མཐོང་བས། [1a6]མྱི་[sic]ངན་ལས་འདས་པར་ལྟའོ། །

[1a7]༎ ༎ཆོས་ཀྱི་རྣམ་གྲངས་མདོར་བསྟན་པ། རྫོགས་སྟོ་[sic]༎ ༎

注

<T1>

[1] མཚམས་མེད་པ་ལྔ་གང་[J320b5]ཞེ་ན། J [2] མ་བསད་པ་ J, T1 is illegible. [3] ཕ་ J [4] T1 is illegible. [5] ཕྱུང་བའོ་ཞེས་བྱ་བ་ལ།... J; see ① [6] དེང་ J [7] ནི་སངས་རྒྱས་མི་ J [8] ཀྱི་ J [9] པའི་ J [10] འཇིག་ཅིང་སྟོང་བ་ལྟ་བུ་ J [11] T1 adds + above ང་, སྟོང་བ་དང་ below དང་. [12] སྦྱར་ J [13] མཚམས་མེད་པ་ལྔ་དང་ཉེ་བའི་ལས་ལྔ་ [J321a1]གང་ཞེ་ན། J [14] དགྲ་བཅོམ་པ་ J, དགྲ་བཅོམ་མ་ J2 [15] པར་ J [16] ཆུབ་སེམས་ J, T1 is illegible. [17] བའི་ J [18] ཕ་ J [19] J omits ། །. [20] པའོ་ཞེས་བྱ་བ་ལ་ J [21] T1 is illegible.

① J: …ལས་ [320b6]འདི་ལྟ་གང་ཡང་རུང་བ་གཅིག་བྱས་ན་སེམས་ཅན་དམྱལ་བའི་གནས་སུ་སྡུག་བསྔལ་ཆེན་པོའི་རྒྱུན་ཙུང་ཟད་ཀྱང་བར་མི་འཆད་པའི་གནས་སུ་ཡུན་རིང་པོར་སྐྱེ་སྟེ། ཐར་པའི་སྐབས་མེད་པ་ནི་མཚམས་ [b7]མེད་པ་ཞེས་བྱའོ། །མ་བསད་པ་དང་། ཕ་བསད་པ་དང་། དགྲ་

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

བཅོམ་པ་བཤད་པ་ནི་གོ་བླའོ། །དགེ་འདུན་གྱི་དབྱེན་ནི། །དགེ་འདུན་སྡེར་ལོངས་པ་ལྔ་བ་ཕྱེ་བའོ། །དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ལ་ངན་ [b8]སེམས་ཀྱི་ཁྲག་ཕྱུང་བ་ནི་བཤད་སེམས་ཀྱིས་ཁྲག་ཕྱུང་བ་སྟེ།

<T2, T3>

[1] J omits. [2] T3 omits ཀྱི་. [3] J omits, T3 inserts ལ་. [4] ཞེས་ T3 [5] མཆོག་ JT3 [6] JT3 insert དཀོན་. [7] གོ་ཞེས་བྱ་བ་ལ།... J; see ②. [8] འོ་ T3 [9] T3 inserts ། ། after ནི་. [10] ནི་ T3 [11] དབྱིག་ T3 [12] T3 inserts ། ། after སྟེ. [13] T3 inserts བ་. [14] བཞིན་ T3 [15] དཀོན་མཆོག་ *[T3.22a5]*གསུན་[sic]ཡང་ T3 [16] ཅིའི་ T3 [17] ॥ བསྐལ་ T3 [18] གྲངས་མེད་པར་ཡང་ T3 [19] འབའ་ར་ T3 [20] T3 omits །. [21] ། ། T3 [22] འདི་ T3 [23] ཅེན་ T3 [24] ཅེད་ T3 [25] T3 inserts འི་. [26] ཀྱི་ T3 [27] བའི་ཕྱིར་ན་དོན་ཆེ། ། T3 [28] ཚོག་ནི་ T3 [29] T3 omits །. [30] T3 inserts ཆོས་ཐམས་ཅེད་[sic]ཀྱི་. [31] T3 inserts ན་. [32] ཚུལ་ T3 [33] T3 adds ཐ་ below ཚུལ་, + above ཚུལ་. [34] T3 omits. [35] གཅིག་ T3 [36] གཅིག་ T3 [37] དམྱིགས་ T3 [38] T3 inserts ཀྱི་. [39] ཉིད་ T3 [40] པ་ T3 [41] ཀྱི་ T3 [42] T3 inserts དོ་. [43] ཏེ། ། T3 [44] ནི་ T3 [45] T2 adds མ below ཆོ., མཆོག་ T3 [46] ཚུལ་ T3 [47] T3 inserts *[T3.23b1]*དཀོན་མཆོག་གསུམ་དེ་ལྟར་དོན་དམ་པར་ཚུལ་གཅིག་ཅིང་། དམྱིགས་སུ་མེད་*[T3.23b2]*ཀྱང་། དེ་བཞིན་བཤེགས་[sic]པ་སྐུ་དག་པའི་བྱིན་དང་། སེམས་ཅན་[sic]གྱི་ལས་ཀྱི་སྨོན་ལམ་གི་*[T3.23b3]*ཐུས་། །. [48] སྣ་ཚོགས་སུ་སྟོན་པ་ནི་ T3 [49] ། ། T3 [50] ངེས་བཤད་*[T3.23b4]*པའི་ཆོས་འདོ་[sic] T3 [51] གཉིས་ T3 [52] T3 inserts ། ། ཆོས་ལས་སྐྱེས་པའི་བྱུང་*[T3.23b5]*ཆུབ་[sic]སེམས་དཔའ་དང[sic]། འཕགས་པ་ཉེན་[sic]ཐོས་དང[sic]། རང་སངས་རྒྱས་དང[sic]། before གང་. [53] ཀྱི་ T3 [54] ~~འདུན་~~ (?) T2 [55] T3 omits. [56] བཞི་ T3 [57] ཆེད་ T3 [58] བདགེ་[sic] T3 [59] དཀོན་མཆོག་ཅེས་བྱའོ། T3 [60] ཚུལ་ T3 [61] T3 inserts འདི་. [62] T3 omits གསུམ་. [63] ཙམ་དུ་སོ་སོའི་ T3 [64] T3 omits །. [65] T3 inserts ། །. [66] ཅ་ T3 [67] བཞིན་གྱིས་ T3 [68] T3 omits །. [69] T3 inserts པ་. [70] ཀྱི་ T3 [71] ཁམས་གསུམ་གང་ཞེ་ན། J [72] ཁམས་ T3 [73] T3 omits དང་. [74] རྒྱུད་ T3 [75] ། ། T3 [76] T3 inserts ། །. [77] གཟུགས་ཀྱི་ཁམས་ J, གཟུགས་ཀྱི་ཁམས་ T3 [78] གཟུགས་མེད་པའི་ཁམས་སོ་ཞེས་བྱ་བ་ལ། J [79] དང་གསུམ་མོ། T3 [80] See ③. [81] ཁམས་ T3 [82] ཇི་ T3 [83] ཁམས་ T3 [84] རིམ་ T3 [85] ཆད་ T3 [86] ཆད། T3 [87] ། T3 [88] སེམས་ T3 [89] ། T3 [90] དེའི་ཕྱིར་ T3 [91] ཁམས་ཤེས་ T3 [92] ཅིག་ T3 [93] དེའི་ T3 [94] སྐྱི་ T3 [95] T3 inserts །. [96] ། ། T3 [97] མན་ T3 [98] T3 omits །. [99] T2 has a few illegible letters. [100] སྐྱེའོ། ། T3 [101] བཞི་ T3 [102] T3 inserts །. [103] ཀྱིས་སྐྱི་བྱ་བ་མསྐྱུ་[sic] T3 [104] སྲོག་ T3 [105] སྐྱི་བཅད། T3 [106] བྱིན་ T3 [107] སྐྱི་ T3 [108] གསྐྱུ་ T3 [109] T3 inserts ། །. [110] གིས་སྐྱི་བྱ་བ་བཞི་ T3 [111] ། ། T3 [112] སྐྱི་སྐྲ། T3 [113] ཕྲ་མ་སྐྱི་བྱེད། T3 [114] མོར་ T3 [115] ཚིག་ T3 [116] སྐྱི་ T3 [117] བཞི་ T3 [118] ཡིད་ཀྱིས་སྐྱི་བྱ་བ་གསུམ་ T3 [119] T3 ends. [120] J omits these sentences. [121] མཁའ་ J [122] ནས་ J [123] འདུ་ཤེས་ཡོད་མིན་མེད་མིན་མན་ཆད་གནས་བཞི་ནི་ J [124] T2 adds སྐྱེ་ below ན་. [125] མེད་པའི་ཁམས་སོ།། J [126] J omits these sentences. [127] T2 inserts + above ལྷ. [128] སྐྱེ་གནས་བཞི་ J [129] སྐྱེ་བ་ J [130] བརྫུས་ J, རྫུས་ J2 [131] སྐྱེ་བ་ཞེས་བྱ་བ་སྟེ། J, སྐྱེའོ་ཞེས་བྱ་བ་སྟེ། J2 [132] J omits. [133] ལུག་དང་། གཅན་ཟན་(གཟན་ J2) ལ་སོགས་པ་ནི་ཕལ་ཆེར་མངལ་ནས་སྐྱེའོ་(སྐྱེ་བའོ་ J2)། ། J [134] J omits. [135] དང་སྦལ་ [317b7]ལྦྱིང་དང་། རྦོང་(རྦངས་ J2)པ་ལ་སོགས་པ་ནི་སྒོང་ལས་སྐྱེ་བའོ།། J [136] འབྲུ་སྲིན་དག་ནི་དྲོད་གཤེར་ལས་སྐྱེ་བའོ།། J [137] མཐོ་རིས་ཀྱི་ J [138] J inserts རྣམས་. [139] འདྲེ་སྲིན་ཡི་དགས་(དྭགས་ J2)དམྱལ་བ་དག་ནི་བརྫུས་(རྫུས་ J2)ཏེ་སྐྱེ་བའོ།། J [140] T2 is illegible. [141] T2 is illegible. [142] T2 is illegible. [143] T2 adds བཀག་ below པ་. [144] ཡང་ J [145] ལྷའི་ནང་ནས་ J [146] J omits these sentences. [147] ཡིན་ཞེས་བྱ་བའི་དོན་སྟོན་ཏོ། །གཟུགས་གང་ཡིན་པ་ཅི་ཡང་རུང་སྟེ། [J.274a6]དེ་དག་ཐམས་ཅད་འབྱུང་བ་ཆེན་པོ་བཞི་དང་ J [148] J inserts ཞེས་བྱ་བ་ལ།... [149] J inserts སྤྱོང་བ་རྣམ་པ་གསུམ་[J.274b6]སྟེ་ཞེས་སྨོས་ཏེ།. [150] J omits. [151] བདེ་བ་ཡང་མ་ཡིན་སྡུག་བསྔལ་བ་ཡང་མ་ཡིན་པ་གསུམ་ཉམས་སུ་སྤྱོང་བ་ནི་ཚོར་བ་ཞེས་བྱའོ།།... J [152] J does not correspond to T2. [153] T2 adds འདི་ below པོ་. [154] ~~ཐེག་པ་ཆེན་པོའི་~~ (?) T2 [155] ཁམས་ J [156] J inserts ཞེས་བྱ་བ་ནི་. [157] རྟེན་གྱི་ཁམས་དྲུག་དང་། དམིགས་པའི་ཁམས་དྲུག་དང་། རྟེན་(བརྟེན་ J2)པའི་[287b8]ཁམས་དྲུག་སྟེ་ J [158] བརྟེན་ཅེས་(རྟེན་ཞེས་ J2)བྱ། ཡུལ་དྲུག་ནི་དམིགས་པ་ཞེས་བྱ། རྣམ་པར་ཤེས་

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

པ་དྲུག་ནི་བརྟེན་པ་ཞེས་བྱ་སྟེ།... J; see ④. [159] T2 adds ང་ below ཐོ.

② J: ...མ་ [310b2]རིག་པའི་གཉིད་ལས་སད་དེ་ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པའི་ཡེ་ཤེས་བརྙེས་པས་པདྨ་ཁ་བྱེ་བ་བཞིན་དུ་བསོད་ནམས་དང་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ཚོགས་རྒྱས་པ་ནི་སངས་རྒྱས་དཀོན་མཆོག་སྟེ། ཡོན་ཏན་གྱི་ཡུལ་ [b3]ཆེ་ལ་འཛིག་རྟེན་ན་ཙུང་བའི་ཕྱིར་རོ་ཞེས་སྨྲར་རོ། །ཆོས་ནི་བཤད་པའི་ཆོས་དང་སྒྲུབ་པའི་ཆོས་དང་འབྲས་བུའི་ཆོས་ཏེ། དེ་ལ་གསུང་རབ་ཡན་ལག་བཅུ་གཉིས་ནི་བཤད་པའོ། །ཕ་རོལ་ཏུ་ཕྱིན་པ་ [b4]ལ་སོགས་ཏེ་བྱང་ཆུབ་ཀྱི་ཕྱོགས་ཀྱི་ཆོས་ནི་སྒྲུབ་པའོ། །ཕྱུང་པོ་ལྷག་མ་དང་བཅས་པ་དང་། ཕང་པོ་ལྷག་མ་མ་ལུས་པའི་མྱ་ངན་ལས་འདས་པ་ནི་འབྲས་བུའི་ཆོས་ཤེས་བྱའོ། །དགེ་འདུན་ནི་ [b5]སོ་སོའི་སྐྱེ་བོ་དང་སློབ་པ་དང་མི་སློབ་པ་སྟེ། གསོལ་བ་དང་བཞིས་བསྙེན་པར་རྫོགས་པ་ནི་སོ་སོའི་སྐྱེ་བོའོ། །རྒྱུན་དུ་ཞུགས་པ་ནས་དགྲ་བཅོམ་པ་ལ་ཞུགས་པའི་བར་ནི་སློབ་པའོ། །དགྲ་ [b6]བཅོམ་པ་ནི་མི་སློབ་པ་སྟེ་དེ་ལྟ་བུ་བཞི་ཡན་ཆད་མང་པོ་འདུས་པ་ལ་དགེ་འདུན་ཞེས་བྱའོ།

③ J: དམྱལ་བ་བརྒྱད་དང་བྱོལ་སོང་དང་ཡི་དགས་(དྭགས་ J2)གཉིས་ཏེ་བཅུ་དང་ [313b4]གླིང་གཞི་དང་འདོད་པའི་ལྷ་དྲུག་དང་བཅུ་སྟེ་ཕྱིར་གནས་ཉི་ཤུ་ནི་འདོད་པའི་ཁམས་སོ། །བསམ་གཏན་དང་པོ་ནས་བཞི་པའི་བར་གནས་བཅུ་བདུན་ནི་གཟུགས་ཀྱི་ཁམས་སོ། །ནམ་མཁའ་མཐའ་ཡས་ [b5]སྐྱེ་མཆེད་ནས་འདུ་ཤེས་ཡོད་མིན་མེད་མིན་མན་ཆད་གནས་བཞི་ནི་གཟུགས་མེད་པའི་ཁམས་སོ། །

④ J: ...དངོས་སུ་ན་མིག་གི་ཁམས་དང་། གཟུགས་ཀྱི་ཁམས་ [288a1]དང་། མིག་གི་རྣམ་པར་ཤེས་པའི་ཁམས་དང་། རྣ་བའི་ཁམས་དང་། སྒྲའི་ཁམས་དང་། རྣ་བའི་རྣམ་པར་ཤེས་པའི་ཁམས་དང་། སྣའི་ཁམས་དང་། དྲིའི་ཁམས་དང་། སྣའི་རྣམ་ [a2]པར་ཤེས་པའི་ཁམས་དང་། ལྕེའི་ཁམས་དང་། རོའི་ཁམས་དང་། ལྕེའི་རྣམ་པར་ཤེས་པའི་ཁམས་དང་། ལུས་ཀྱི་ཁམས་དང་། རེག་བྱའི་ཁམས་དང་། ལུས་ཀྱི་རྣམ་པར་ཤེས་པའི་ཁམས་དང་། [a3]ཡིད་ཀྱི་ཁམས་དང་། ཆོས་ཀྱི་ཁམས་དང་། ཡིད་ཀྱི་རྣམ་པར་ཤེས་པའི་ཁམས་སོ་ཞེས་སྨོས་ཏེ། གོང་དུ་བཤད་པ་ལྟར་རིམ་བཞིན་སྦྱར་རོ།

NII-Electronic Library Service